

## 仏壇を背負しよって

塚田源秀

秋のお彼岸ごろ、とうの昔に亡くなった祖母が頻々と仏壇を背負って細くて急な階段をのぼって私の部屋にやってくる。階段のみしつというきしむ音が聞えてくる。家の仏壇は大きく持てるはずもないから夢だとすぐわかるのだが、なかなかどうして、すごく現実味があるのだ。祖母は腰をかがめて部屋に入って、よいしょつと言ってどすんと私の寢床の前に座る。ランドセルの肩ベルトを脱ぐように背中から仏壇を降ろしふつと息を吐いて、私の顔を覗き込むのだ。夜だから当然真つ暗闇である。不思議と仏壇の扉は開いていて、さすがに蝋燭の火は点いてはいないけど、金の装飾がまばゆく、その真ん中に鼻筋の通ったきりつとした目の顔が浮ぶ。祖母の輪郭ははっきりしていて、若いころの写真をみても怖いぐらいの美人である。線香もしくは煙管きせゐの刻み煙草の匂いがする。

「欣司よ。不思議な夢を見てな——」

「……」

「お前が家に帰って来たときに、大きな木を背負ったひよろつとした背の高いイジンスんも玄関先に来られてな。海に向こうの教祖さんやと思うけど、お前なんか心当たりないんか？ ワシは夢など見たこともない人間だけに、気色わるうて。どなたさんやろと訊ねても、ただ黙ってぼうつと突っ立ってるだけで、ほとんど白い布を羽織っているだけやし」

「知らないよ。いい加減にもうその話は止めてくれるかな」

寝返りをうって祖母に背を向けた。どれだけ時間が経ったのかわからないが、そんな

らなど言って仏壇を背負って立ち上がりとしている。祖母の後ろ姿は絶対に見てはいけないと私は自分にいいかさせた。ナンマイダブ、ナンマイダブ……と遠ざかる彼女の声。どこへ帰るのかという恐ろしさがあった。そして、彼女を冒瀆してはいけない――。

そんな夢を見るのは、きっと二週間ほど前にポストに入っていたチラシがそうさせたのか。「地図から消えた村落」というタイトルでモノクロの写真が掲載されていて、ダムで沈んだいくつかの集落の暮らしを一人のアマチュア写真家が撮ったものだった。私の住む町からそう遠くはなく車で一時間くらいの場所であった。アーカイブとして記録された写真の数々を写真集として販売するらしい。昭和四十年代中頃に離村した光景である山の実り、川、田畑の収穫、お祭り、氏神さん、結婚式、離村式などが写されており、その暮らしぶりはまるで戦前のような質素さを感じた。その当時であれば私も生まれてはいたけれど、小学生にもなっていないので、そんな記憶も知る由もなかった。ともあれ、その中で目を引いたのは大きな仏壇を背負った主とみられる男が嫁、子供、祖母を従え田んぼのあぜ道を着の身着のまま腰をくの字にして必死の思いで歩いている写真であった。その写真の中には、他の家族も遠景にいて、同様に急いでいる姿があった。車は無かったのだろうか、山がダイナマイトで爆発される寸前だったのだろうか、山崩れなどの災害が後ろに迫っているような緊迫感で、これだけは護らなければならぬという信心深さが男の表情から見てとれた。彼の体重よりはるかに目方がありそうで、軽く百キロくらいはあるのではないだろうか。口は一文字にして眼が飛び出るような形相で、まるで土門拳のようなりアリズムの写真であった。私はチラシに掲載されている一枚の写真に心を奪われていたこともあって、祖母が代わって仏壇を背負うことになってしまったのだろうか。

私が実家に帰った前夜に祖母が見た夢であるが、今思っても摩訶不思議な話である。

実家に帰ってきて、もうすぐで十数年が経とうとしているが、この間に祖母や父母も鬼籍の人となって、私がぼつんと大きな家で一人暮らしている。帰ってきた頃は不惑の四十をいくつか越えていて、まだ仕事に対して夢や情熱というのもそれなりにあったように思う。東京でキャリアを積んできたという自負もあった。しかし、先の全世界の株暴落が仕事を直撃した。その後まもなく会社は倒産した。落ち込みはなかった。不可抗力であったし、なにより私のまわりにも職を失った人がたくさんいたからであった。出会い頭の交通事故に遭ったと思えばいい。取り急ぎ、日銭が入る仕事を見つけては、その日その日を過ごしていた。片田舎に帰ってこれからの人生を送る気持ちなどさらさらなかった。しかしながら気持ちを高めれば高めるほど、すつと心に魔物が入ってくる瞬間がある。魔物とは、宗教やその類のものである。その頃はまだ東京に住んでいたのだが、仕事を含め将来に向けての漠とした不安を醸し出してそれが呼び水となっているのか、家の内外においてよく目にするのがそういう種類のものだったりする。人から宗教の誘いを受けることもそうである。そう遠くない知人からその手の新聞を購読してみないかと電話がかかってくるか、近所の人アパートを訪ねて来たりとか、三、四の宗教の誘いを受けた。ほとんど相手にしなかったが、真摯に聞いてくれる人もいて、部屋の中に入れたりもした。会堂が近くにあったこともあって、たまたま日曜の朝の集まりに行ったことがきっかけであった。酒に逃げている時期でもあったが、頑張つて起きて会堂に行くと、心が洗われ、不規則な生活からも抜け出せそうで、一本の光明が自分の心を射止めた感があった。ま、その後いろいろあってその宗教に入信してしまつてご神体を頂くことになったわけだが、信心している人たちの「良かったね」としんからの喜びの表情に、どうしたわけかすつと冷めていく自分があった。涙を流す信者もいて、いたたまれなくなってしまう。そのうち、そういう人たちに疎ましさを感じ、距離をとりはじめていった。何もかもが嫌になって、見上げる青空さえもそう感じた。今日も東京は

青空が広がっています、という天気予報を聞くだけで腹だたしかった。不思議とずっと忌々しく思っていたどんよりとした鉛色の空が無性に懐かしく思えてきた。低く重い雲が立ち込める様は、子供の頃の硬く厚い掛けぶとんをかぶったような肌ざわりであった。故郷へ帰ろうと思った。

実家に帰る頃には、私の信心もそぞろになってしまつて、高まつた気持ちをどこに仕舞っていいのかわからない心境であつたように思う。帰ってきた前夜に祖母が夢を見たというのは、テレパシーやオカルト的な話を信じない私にとつても、あながち偶然というだけで処理できないような感じではあつた。祖母の南無阿弥陀仏の信心深さからか、私欲を捨てた無垢な心がそうさせたのだろうか。

そんな私も帰つてきて職も転々として、今では老舗の家具店でパートとして週五日働いている。正社員としてはあえて希望しなかつた。年齢的なこともあるし、いつもふらふらしていたせいか、責任ある仕事を任せられることや、上司が年下というのも自分の性格上難しそうだと感じたからだ。お金のことも当然あるが、それよりも身体を動かすことで日々のもやもやした気分をすこしでも忘れさせてくれていた。それに親が遺してくれた財産がいくらかはあつた。仕事内容は、車での配達を中心に店内販売も手伝つた。先代の創業者の女主人は私の祖父母のことをよく知っていた。女主人は、細身でいつも洒落た服を身に付けていた。姿勢が良く律儀さが伝わってきた。「とくにお祖母ちゃんにはお世話になつて」と顔を合わせる度に微笑んで私に頭を下げた。理由はわかつた。家具店と名乗っているものの仏壇の販売も兼ねていたからであつた。二階には多くの仏壇が並んでいた。

この店に雇われる前からこの家具店は、よく潰れないなど不思議であつた。大きな店だけに一階のウィンドウから見える店内はいつもがらんとしていてソファや家具なども全く動かず、商売として成り立つのかなと、車で通るたびによく思ったものだ。外国

資本を含め大型のチェーン店が台頭している中、そのうち廃業するのではと思ったものだ。雇われてみると、なるほどと感心した。やはり土地柄と女主人の人柄であった。田舎ならではの昔からの家との付き合いや冠婚葬祭の結びつきは強固なもので、お得意様リストをいつも金庫に保管している位であった。先日、婚礼家具を購入した客で、その支払額は五百万円だった。それが普通とのことだった。仏壇にしても同じで、得意先リストには、多くのお寺なども載っていた。もちろん仏壇だけではなく、仏具や装飾品の販売や仏壇の洗濯も承っているのだ。

しばらくして同じ在所に住む従兄弟の信弘さんが家にやってきた。彼は私より二つ上で去年、還暦を迎えたという。

「やあ」と手をあげて入ってきた。「久しぶりだね」

「本当にご無沙汰で。お仕事のほうは？」

「一旦退職して、再雇用で働いているわ。今は現場から総務付けで電話対応ばかりで。慣れなくてね、ずっとパソコンの前で座りっぱなしだし」

「でも、元気で働けるのが何よりですから」

私は式台に座ぶとんを敷き、信弘さんに座ってもらった。

「ところで、だいごうさんの件なんやけどな」

「だいごうさん？」一瞬何のことかと思ったが、はっと思い出して「たしか、まわり仏さんのことですか」

「ちがうちがう」と笑って手を振り「欣司さん、こっちに帰って何年になる？」

「十年ちよっとくらいかな……」

「十年も経ってるんやったら、在所のことすこしは覚えとかんと。ずっと欣司さんのお母さんが参ってやったで、よくわからないと思うけど。実は来年が欣司さんの家が当番

なんやで」

「えっ、そうなんですか」

「今年はコロナで出来なかったけど、来年はやらんとな」

「母にまかせつきりで、お恥ずかしい。何にもわからなくなつて。そもそもだいごうさんって何ですか？」

「だいごうさんという名の意味まではわからないんだけど」と切り出し、彼はつぎのよ  
うに要約してくれた。まわり仏さんは、京都が炎の包まれた天明の大火（一七八八年）  
で焼失した東本願寺を再建する際に、湖北の門徒が多数奉仕したことから、この労苦に  
対して、二十代法主である達如たつによ上人から、乗如じょうによ上人の御寿像ごじゅぞう二副と御書ごしょが  
下付かふされたという。こうして下付されたこの湖北の地域では、講を組織して、御寿  
像を順番に各村の家で回していくルールが作られていって二百年以上続いているとのこ  
と。それに対して、だいごうさんはこの在所だけのもので、福永家と塚田家が一年毎に  
如来ご本尊を回し安置して、元日の日、福永・塚田家の八家の人たちが当番の家に集ま  
って、正信偈しょうしんげを唱えるとのことだ。だいごうさんという名の由来については信弘さん  
もわからないという。歴史も浅く、おそらく百年も経ってはいないらしい。

「今と違ってこの地域の昔の人は時間もあるし、冬は雪で何にもできないし、神事もそ  
うだけでも、何かにつけて信心深かったんだろな」

「でも、どうして福永家と塚田家だったんですかね」

「さあなあ……たまたま何かの集まりで決まったんじゃないかな」と信弘さんは首をか  
しげ「欣司さんのおばあさんにしても信心深かったな。いつ伺っても多くの人とお祈り  
してるし、そうでなければ火鉢を横に長い煙管を粹くわに銜くわえていらしたのを覚えてるわ。  
こんな田舎にはいない、垢抜けた人だったな」

信弘さんは尻を上げ「また仏具一式を持っていく際に連絡するわ」

「重いものですか？」

「重い重い、二人で担がんと無理。七、八十キロはあるんじゃないかな。家の前までは車でなんとか運べるけど、仏間まで持ってくまでが大変で、手伝ってもらわないと」

「わかりました」

彼は帰りがけにこうも言った。「あと、当番は前に出て正信偈しょうしんげを導師として勤めることになってるんや。鈴りんも鳴らさなければならんし、お経を覚えとかなあかんで」

ふだん祖母のことなど気にもしていないが、例の夢のこともあって彼女のことを思い出す。私が小さい頃から、祖母は南無阿弥陀仏を信心するというより、取り憑かれていくというほどの人であった。ナンマイダブ、ナンマイダブといつも口からこぼれていて、私がすることなすこと、地獄へ墮ちる、罰が当たると口癖のように言っていた。私が、死んだら人はどこにいくのと口にするものなら、念仏を唱えるんや、悪人でも助けくれやあるんや。なら、みんな念仏唱えたら極楽浄土へ行けるんかと聞くと、アホ、万人に一人や、いや何十万人一人や、家のご縁えんさんくらいしか行かれへんわ。ご縁さんというの、如来さんと我々を縁で結ぶ尊い人なんや。ほとんどの者が閻魔さんに裁かれ舌を抜かれて火あぶり刑になるんや。だったら念仏唱えんかって同じじゃんかと返すと、どアホ、オマエは大罰当たりで、ど地獄へ墮ちるほん。祖母が語る地獄はまさしく地獄絵図そのものでおどろおどろしいものではあったが、いつも長い煙管を斜めにして吸い口に口をつけてふうっと煙を出す仕草によって、煙に巻かれる感じがあった。どこか浮世離れた感もあって子供ながらにその時間を楽しんだ。また年に数回、親戚縁者であるご縁さんを家に招いての説教を二泊三日で行うのだが、泊まり数名含めて十名のぐらいのおじいちゃん、おばあちゃんを中心とした信者たちが方々から集まってきた。私も学校から帰ってくると仏間に入らされるのだが、ご縁さんの話に、みんな腰を丸めてナ

ンマイダ、ナンマイダとこぼしている。ご縁さんの説教の話などまったくわからなかったし、興味などなかった。しかし淡々とした話の流れにも盛り上がりというところがあるようで、その気持ちをご縁さん自身にも抑えきれず自らナンマイダ、ナンマイダと彼の口からこぼれていく。すると一斉にすすり泣くようにナンマイダブ、ナンマイダブが仏間に鳴り響く。異言の連呼が、異界を創っているようであった。信者らの顔を見れば、まるで極楽浄土へ行けたような喜びに満ち溢れている。そういえば、平安時代の僧であった空也くうや上人しょうにんの像だってそうである。口から吐き出すように六体の阿弥陀仏が現れて念仏を唱えれば救われると。あの祈りの姿は精神性に富み圧倒させられてしまう。祖母にしても食事の支度もあつて出たり入ったりと大忙しであったが、充実した気持ちが身体からみなぎっていた。大きな生きがいであったのだろう。

そんな祖母ではあつたが、殺生はアカンと口ぐせにしているくせに、大の肉好きで相撲ならまだわかるが大のプロレス好きでもあつた。流血を見て興奮し、テレビのまん前に座る。ちょうどその時間は裏で歌番組があつて、私とチャンネル争いをしていて、祖母は絶対に譲らなかつた。血が噴出す生身の地獄絵図に高揚していたのかもしれない。テレビ画面に釘付けなっていて、手を合わせている姿は、まるで仏壇の前で拝んでいる姿と同じであつた。母や父に助けを求めても、おばあちゃんには勝てへん、あきらめと諭されてしまう。真逆である南無阿弥陀仏とプロレス、肉好きが祖母のなかで無理なく両立されているのである。くりかえしになるが長い煙管にしてもそうで、小粋な所作もあつた。いつも着物姿で、衿を後ろにしてどこかしら浮世絵でみる町女や遊女の趣きがあつた。誰から聞いたのであろう、祖母からではないことは確かなのだが、祖母の父は相当な遊び人だったようで、人力車での遊郭からの朝帰りを習慣としていたらしく、芸にも造詣があつたような。なんの仕事をしていたかわからないが裕福なお家だったようだ。そんなこともあつてNHKがやっている浄瑠璃や歌舞伎の番組も祖母は欠かさず

観ていた。

祖母と一緒に暮らしていた私であったから、南無阿弥陀仏の信仰をずっと受けていたかという点、そうでもなかった。小学生までは朝夕のお勤めのせいで教本を見なくても「きみよーむりよーじゅーによーらいー」と最後までしょうしんげ正信偈を唱えることもできていたように思う。しかし、母の存在があった。母は養子取りの家付き娘で、祖母とは実の親子の関係であったが、信仰に対してはズレがあった。祖母は現世よりもあの世の極楽浄土が大切で、母はその反対であった。母は若い頃から病気がちのところがあったように、それを直すためには現世利益の宗教を頼りに、まるで味見するようにいろんなものを試した。年齢からいっても、間もなく死に行く者と、まだまだ生きる者との差異があってもうなずける。

母は私を連れまわして、私をだしに味見どころか毒見の役までさせてしまう。母はお前のためにと言うが、何のことはない母の所有物であり、奴隷そのものである。母はいろいろ味見した結果、弘法大師の南無大師遍照金剛、真言宗を信仰することになった。タイミング良く、何かしらの功德を感じたのかもしれない。家には阿弥陀如来の本尊が鎮座しているだけに、大日如来や弘法大師を安置することはできない。そうになると家の外で信仰を求めていくしかなかった。だから日曜となると、私を連れて大師堂へお祈りと講話を聞きに行き、春休み・夏休みになると、四国八十八か所の巡礼の旅に出されてしまうのだった。

母と祖母の信仰の対象は違っていたが、私の前では大きな争いはなかったように思う。そこが肉親の不思議さである。信心ほどある面厄介なものはないというのを二人ともわかっていたようで、あえて親子の間柄でも相手に攻め入ることをせず自分の領域だけは守ろうとしていたのではなからうか。信心では折り合いがつかなくても、その他の問題があった場合は二人は結託して、よく父を責めていたように思う。

たった一度こんなことがあった。その時も私が小学生の頃だったように思う。血相を変えた母が仏間から私のいる居間に逃げ込んできて、私に視線を合わせずそのまま祖母の部屋の方に走った。父は夜勤で留守だったから、おそらく夜のことであつたらう。仏間には、ご就寝のご縁さん一人のはずである。何があつたんだろうと祖母の部屋にそつと向かつて、障子越しに聞き耳をたてた。ご縁さんが抱きついてきた、おそわれたようなことを母が祖母に興奮まじりに口に行っているのが聞えた。祖母は喋らず、鼻をすすっている音だけが聞えてきた。祖母の癖で、気まずいことや居心地がわるいことがあるとそれをやり、自分を落ち着かせようとしているのだ。

「ご縁さんは、仏に仕える近い人だぞ。そんなことする人じゃない。オマエの勘違いにきまつとる」ありきたりな弁明しかでない祖母の声を聞くや、私は居間の方へ戻った。男女の色恋など子供だった私にとってよくわかっていなかった。ただあのツルツルした頭にねっとりした笑みと柔らかい話し方、口に手をあてる仕草が女のように爬虫類っぽくって薄気味悪く感じていた。しばらくして仏間からまた静かにナンマイダ、ナンマイダと聞えてきた。

自分の部屋の押入れにしまいっぱなしのバッグを取り出した。もう十数年、気が重かつたせいで放っておいた。祖母の夢を見なかったら、ずっと封印したままだっただろう。東京から持ち帰ったきりで、まるつきり開かずのバッグである。バッグの皮は色あせ、いびつにやせ細っていた。ブランド品ではあったが、使わずじまいでもう利用価値もない。ほこりを手ではたいて、固くなったチャックを力ずくで開けた。中にはご神体のお札ふだがそのままの状態が入っていた。和紙のような白い紙がご神体に巻かれている。本来白い紙を外してお祀りすべきものであるが、ずっと外さないままにしておいた。気にはなっていたがどうしようもなかった。剥がしてご神体を見るのが怖かったからだ。実

家に帰ってしばらくは入信先や信者から何度か電話があったが、そのうち何の連絡も来なくなつた。捨てるわけにもいかず、神体を入信先へ返すべきであつたのだろうか。福沢諭吉みたいに神仏を恐れず、どんなお札ふだでも踏み潰す行為は私にはなかなかできない。祖父の妹が新興宗教に入信し、南無阿弥陀仏の本尊と仏壇を燃やしてしまったという話も聞く。放つたらかして十数年とくに病気や大きな災いも起きなかつたことを考えてみれば、これも良しとして、そのままにしておこうか。バッグに戻すのはどうかと思ひ、隣の本棚のガラス戸を開けてみる。久しく開けていなかったので、インクと紙の入りに混じつたすえた臭いが鼻につく。改めて隅々まで見ると、ビジネス書から、国内外の小説、漫画、哲学・思想といろんな種類の本を買つたものと自分でも半ばあきれてしまふ。買ったことすら覚えていない本も少なくない。マックス・ヴェーバー、ハンナ・アーレント、サルトルなどの哲学書もある。知つたかぶりで買った哲学書だが、理解できないばかりか、ほとんど最後まで読み通せてはいない。サルトルの本を手にしてしばらくとめくつていくと、ページの角が折つてあつたせいで、あるページが開かれる。

——人間は自由の刑に処せられている——の文章に赤いペンで線が引かれていて、その横に、自由であるから人間は不幸なのか、と私書き加えていたのだ。覚えていなかった。前後の文章を読みながら、当時自分はこんなことを考えていたのか、とため息をつく。本を元の場所に返し、申し訳程度にお札ふだをたてかけた。

それから今日は十一月一日ということで、買ってきた小菊を仏壇に供えに仏間に行く。仏壇の前に座り扉を開ける。お彼岸とお盆、毎月一日の日に仏花を飾る程度で、あとは何もしない。数珠も手にせず線香もあげない。ただ鈴りんを鳴らし、ご先祖さんと仏壇の正面の阿弥陀さんに南無阿弥陀仏と唱えるだけである。いつ正信偈しょうしんげのお勤めしただろうと思ひ返す。半年前に母の三回忌で近くのご住職に来てもらつてお勤めしたきりだつたか……。二ヵ月後にだいごうさんが待っている。コロナ禍がひどくなって、福永家と

塚田家の誰かから「止めとこうか」と声が上がればいいのだがとよからぬ考えがよぎり、はたきで壇に溜まったほこりを払う。この仏壇は、たしか私が小さかった頃に買い換えた物ではなかっただろうか。祖父が存命していたようにも記憶しているが、夜、私を除く家族が仏間に集まってひそひそ話をしていたのを覚えている。仏壇屋も来ていたのだろう。いくらで買ったのかは知らないが、家一軒ぶんの値段と祖母あるいは母から聞いたような。江戸時代から続く伝統工芸として受け継がれることだけはあって、周りの飾り金具や漆、彫刻が見事である。しかしよく見てみると、金箔の色あせや剥がれ、板の割れ、虫食いも所々見られる。それでも正面の阿弥陀如来は何にも語らない。家燃やしても仏壇は燃やすな、という昔ながらの湖北地域の言い伝えが、あの写真の大きな仏壇を背負った男にもきつとあったのだろう。

扉を閉め、下がってみる。あらためて見ると大きい仏壇やなあ——ひとり身の私にとつてこの仏壇は荷が重い。母が「お洗濯お洗濯」と口にしてしたが、けつきよく出来ずじまいになってしまった。今お願いしても、おそらく安く見積もっても数十万はするだろう。時流に合わせてのミニ仏壇で充分である。墓じまいというのをよく耳にするが、仏壇じまいというのもきつとあるのだろう。

祖母や父、母の遺影を見上げる。この十数年にわたって、父、祖母、母の三人とも少しずつ死んでいくような様さまであった。すこしずつ死んでいったというのは身体が弱っていくということもそうなのだが、筋肉が細り、皮膚と骨になっていく様を見ると、即身成仏を見ているようで、娑婆のはかなさや尊さを感じた。三人とも家で看取った。母は、祖母の年に近づいていくと、極楽浄土へと南無阿弥陀仏と唱えていた。そんな私も信心ではないが、ふと気づいたら殺生ができないようになっていた。家に出没するムカデやゴキブリでさえもティッシュでつかみ外へ逃がしているのだった。

母や祖母が亡くなってから、何の音沙汰もなかった。死んだら必ずあの世の世界を教

えると言っていたくせに。でも、仏壇を背負って夢の中に現れた祖母は、夢を通して何か伝えたかったのだろうか。

祖母は死ぬ直前までたった一服だったが煙管を手にして、日本酒を口に塗らす程度に欲し、母はビールを欲した。そして残されたものは、物質としての骨だけであった。

正信偈しょうしんげ の勤行本を居間でばらばらとめくってみる。小さい頃は九九を覚えるように教本を見ずに唱えられたのに、今となっては法事やお寺の集まりぐらいいしか手にしないこともあり全然頭に入ってこない。「きみよーむりよーじゅーによーらいー」と読教してみる、二度三度さらに繰り返す。文字の横の線がひいてあり、真横だと音程が同じであり、ところどころ少し下がっているのが、抑えて読むことになっているはずだが……。抑揚と息継ぎの間が全然なっていない。缶ビールを片手に、何気なくスマートフォンを手にする。あっそうだと思い、きっと正信偈しょうしんげ の読教も動画配信されているはずだと、検索してみる。出てくる出てくる、便利な時代になったものだ。大きく分けて本願寺派、真宗大谷派などがある。宗派によって、抑揚などの唱え方に違いがあるのだろう。家は東本願寺なので、そこをタッチする。すると、信弘さんから、夕方になってしまったけど、今からだいごうさんの仏具持っていい？ との電話が入った。

信弘さんは軽トラでやってきた。普段は軽自動車に乗っているので、どこからか借りてきたのであろう。荷台には駕籠を担ぐような長い大きな木箱があった。

「そっち担いでもらえるかな。重たいから、腰に気をつけて」

「わっ、重い。底抜けそうな感じ」

「ゆっくり、ゆっくりな」

仏間まで運び終わって息をつく。長い木箱の上に小ぶりな木箱が載っている。

「あっ、それね。阿弥陀如来さんの掛軸。一番大事なものだから。これから一年、そこ

に飾つといて」信弘さんは、仏壇横の床の間に目をやった。「この掛軸、福永家・塚田家から誰か亡くなられた際には、必ず借りに来られるのでよろしくな」

「そんな立派な掛軸なんですか」

「お寺に飾るにふさわしいものだと思うよ」

信弘さんは大きな木箱を開けた。中には白い布に包まれた内敷<sup>うちしき</sup> や香炉、大きな鐘、供<sup>くげ</sup> 筒 や、さらに木箱に入った菊<sup>きく</sup> 輪<sup>りん</sup> 灯<sup>とう</sup>、金<sup>かな</sup> 燈<sup>とう</sup> 籠<sup>ろう</sup> など仏具など二十数点が入っていた。

「仏具を仕舞っていて気づいたんやけど、おまんどころのおばあさん、たくさんの仏具を寄進してやるわ。これそうや。これも。信心深かったからな。エライ人や、ほんまに」

彼は箱の隅に入っていた一枚の写真を手にして、「これに飾り方が写してあるから参考にして。もしわからんところがあつたら、連絡してな」と帰っていった。

がらんとしている二階の仏壇コーナーに、いつもの母子がやってきた。「来たわよ」

と中年女性スタッフが一階へ降りていって女主人を呼びに行った。私は母子に近づいて「こんにちは」と声を掛けた。「すみません、いつも見せて頂いてばかりで」と母親は何度も頭を下げた。男の子は「また来たで」と奥の展示コーナーへ走っていた。「走っちゃダメ、悠馬」と彼女は息子に声を掛ける。その意味は二つあって、ひとつはお店であるということと、もうひとつは彼が心臓病を患っていることだ。彼は小学三年生でほとんど学校には通っておらず、病院と家を行き来している毎日だという。仏壇とお墓が大好きで、時間さえあれば近くの仏壇店や墓石店、墓地へ行こうと息子に付き合わされるそうだ。

「悠馬くん、まるで遊園地やテーマパークに来ているような喜びようですね」

「本当にそうなんです」と頭を下げた「おばあちゃん子で、隣が墓地ということもあつ

て、よくお参りに連れていったもので」

「きつと墓地の中を走り回っているんでしょう」

「ええ、私の父が昨年亡くなって、まだお仏壇が買えてなくて。悠馬がジジに会いたい、ジジに会いたいと言うもので」

女主人が二階に上がってきて「いらっしやいませ」かかをつけてお辞儀する。背筋がすつと伸びて美しい。

「すみません。お邪魔させて頂いて」

「いいえ。どうぞごゆっくりなさってください。先日も、鈴りんと経本を買っていただいたて」

悠馬くんが近くに来て、ナップサックを肩から外し、袋の中から鈴とりん棒を取り出し「持ってきたで」と彼女に見せる。

「ありがとう。大事に使ってちょうだいね」

「うん。家に仏壇ないから、持ってきた。ジジに会うんだ」

「じゃあ、お仏壇見にいこうか」

「行こう」

悠馬くんは女主人の手をとって、奥の展示コーナーへ誘った。

「一人っ子だし、学校や近所の子供たちとも知り合うチャンスがなくて」

母親は息子の方をみやった。私も倣って二人のやりとりを見ていた。

悠馬くんは、展示の一つひとつの仏壇を目を離すのが惜しいという風にじっくりと見つめる。これカッコいい、めちゃ光ってる 彫りものがすごい、と声が弾んでいる。

「仏壇造っている工房、今度見にいこうか。いろんな職人さんが集まって造っているの  
よ」

「本当？」

悠馬くんは「これに決めた」と今日の仏壇を決めたようだ。彼はナツプサクから骨壺を取り出し、仏壇の中に置いた。

「悠馬君、じゃあ、お祈りしようか」

女主人は、近くにあった蠟燭を仏壇に供えて火を点けた。

鈴がチーンと鳴って、ジジ元氣、会いにきたよ、と悠馬くんの声が店内に響き渡る。

「仏壇もお墓も、あの子にとってはお参りというより、あいさつの場所なんでしょうね」  
母親は遠くを見るような眼で二人を見ていた。「悠馬はいつも生死の綱渡りをしていくような日常で、死の世界がいつも隣にあるくらいの感覚なのかもしれません」

すると、バチバチという蠟燭の火の音が鳴った。

「うわあ、すごい。火が大きくなったよ、お母さん」

彼はこっちに向かって驚いている。

「おじいさんが会いにきてるのよ、きつと」

女主人が彼の耳元で囁いているようだった。

\*

元日の朝がやって来た。窓からは鉛色の空しか見えず、細かい雪がぱらぱらと舞っている。まずは、だいごうさんの準備だ。仏間に行って仏壇に手を合わせ、タイマー予約していた炊飯器の蓋を開ける。張りつめた硬い空気の中に、真っ白い湯気がワツと立ち、顔が痛く目をつぶってしまう。顔をそらし、しゃもじを入れて手早く真鍮の仏飯器にご飯を小高く盛る。蓮のつぼみのような形にするため、仏飯器にご飯を盛った後、一旦水につけて、しゃもじの背で形を整える。こんな形でいいかなと、もうひとつ仏飯器に盛り付ける。お盆に載せ、鶴亀燭つるかめしやく台だい、角花瓶の間に供える。いずれも金の真鍮製であ

る。花は生け花の先生にお願いして生けてもらった。仏華はいくつかの作法があるように、花材の多さとボリュームが大切だそう。その間から湯気がすつと上に上がって、炊き立てのご飯の匂いがする。仏様やご先祖にとって、この湯気こそがご馳走になるとのことだ。

阿弥陀如来さんの掛軸が曲がっていないか、そのほか足りないところはないか、ひと通り確認して、スーツに着替え、扇子と数珠と袈裟、賽銭を持ち、まず氏子として在所の神社に年頭の挨拶に出向く。小米ここめ 雪ゆき が肩に落ちる程度だから、傘はいらない。

鳥居をくぐり本殿に二礼二拍手一礼して社務所でお神酒を頂き、その足で門徒として寺に参る。代替わりも少しあるが三十数人ほとんど同じ顔ぶれであり、ずっと毎年同じことを繰り返す。これからおそらく続くのであろう、絶えていく家以外は。

道中、軽く会釈しながら山門に入り下足してお堂に入る。また隣の人と、おめでとうございまずと軽く会釈する。みんなの顔を近くで見ると、全員マスク越しであったが、一様に老けているように思えた。顔にしわをつくり、すでに頭の薄い人もいる。ふだんも顔を合わせているのに不思議に思えた。十、十五以上ちがう人もいるのに、まるで同世代のような顔つきである。若い頃、はるかに年上だと思っていた人たちだったが、実はそうでもなかったと後で気づく。もう六十、七十は同世代であった。子供のころの面影を残しているものの、それよりも印象深かったのは、それぞれの顔、姿が、彼らの父親にそっくりなのだ。彼らを見ていると、鉛色の空で育まれてきた木や石のようだった。彼らに迷いや屈託がないように思えた。とくに信心にしてはそうである。私は一瞬、子供のころの自分が迷い込んで、ここに座っているような気分を味わった。

住職が現れ年頭の挨拶をし、門徒全員が正信偈しょうしんげ を唱える。私はいよいよごうさんの準備のため中座して自宅へ戻った。

仏間を暖めるため二つのストーブのスイッチを点け、福永家・塚田家の門徒七名を待

つ。正信偈しょうしんげの読教までに、コーヒーを飲んでもらわなければならぬので、その準備をしなければならぬ。新しく買ったコーヒーマーカーで八人分のコーヒード豆を挽いておく。器も汚れていないか確認する。来られたら、あとは淹れるだけにしておく。

私は、表座敷のすみに正座し、七人の門徒を迎えた。扇子はあらかじめ、頭を下げる位置のところに置く。門徒の一人ひとりに対して、「明けておめでとうございます。ようこそお参りいただきましてー」と決まり文句のような挨拶をして頭を下げた。信弘さんも来られて「緊張せんと、落ち着いてやったらええで。僕もよく口ごもったりするから」と口にして仏間に足を運んだ。

ふと振り返れば、後ろに座っていた母や祖母が私の背中越しに「ちゃんと、挨拶をせなあかんがな」と茶々を入れてくるような感じがした。

お茶の時間も終え、年長の隆明さんがそろそろと言って、私が前に出て仏壇と床の間の燭台のロウソクに火をつける。不思議と緊張もなく、仏壇の前に座る。どう転んでも上手く唱えることはできないことはわかっていたからだ。教本を右手に、左手にはりん棒を持ち、ゴーンと鐘のフチを叩く。低い音が響き渡って畳の上を滑っていく。「きみよーむりよーじゅーによーらいー」と私が唱えると、後ろの七人が「なむふかしぎこー」と続いて盛り上げてくれるような、逆に私をリードしてくれるような感じを受け、流れていくような未だ経験したこともない読教の中に今自分はいると認識した。導師としての役割であることを忘れずに、箇所箇所鐘のフチを叩く。動画配信が役に立ったのかどうかわからなかったが、最初から最後まで何とか躓くこともなく、最後に南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……と終える。振り返って、「ありがとうございました。それでは、

最後に御文おふみさんを詠ませて頂き、年頭のお勤めを終らせていただきます」と

御文章箱ごぶんしょうばこから御文さんの一節を詠む。「それ、人間の浮生ふしょうなる相をつらつら観ず……朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる……たれの人もはやく後生の一大事を心にか

けて、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。あなかしこ あなかしこ」と頭を下げ、御文を両手で高く持ち上げた。頭を下げていた七人の門徒は、頭を上げ数珠を手にして合掌した。「いやあ、導師としての欣司さんの読教、はじめて聴かせてもらったけど、すごく良かったわ」とお世辞など口にしたことない隆明さんが言い、他の人も口を揃えて「一緒になって唱えやすかった」とうなずいてくれた。いやいやと手を横に振って、「皆さんが逆にリードしてくれたからです」と恐縮した。

いやあ、それにしても立派な仏壇やなあ、と隆明さんが山を見上げるように言った。

カタンという音が鳴り、ガラス戸に風が当たったのか、そちらに目をやると遠く向こうに山が見えたような気がした。鉛色の空に雲が切れたのかもしれない。ふと私は子供の頃に父と祖母で何処かの山に行ったことを思い出した。ワラビなどの山菜を採りに行った時かもしれない。私は山中ではぐれてしまい迷いに迷ってすこし拓けた所で蹲うずくまっていた。もう日が暮れそうになっていた。一時間は経ただろうか、祖母が数珠を持って現れ「欣司、動くじゃないぞ」と繰り返す。横目で見ると、木の枝から私の肩に白い蛇が乗ろうとしている瞬間だった。祖母がナンマイダブナンマイダブと念仏を唱えゆっくりゆっくり近づいてくる。私の肩ぐらまできていた蛇の頭がくると反転してすると枝の方へ戻っていった。祖母に「噛まれたらどうしよかと、怖かった」と泣きべそをかきながら安堵していると、「その逆じゃ。ワシが来るまでおまえを護ってくれたんや。白蛇だったろうが、きつとそうにきまつとる」と言う。振り返れば、白蛇の姿はもう見えなかった。不思議なことに、辺りは闇が近づいているのに、その場所だけに変に神々しく光に満ち溢れていた。祖母も何かを感じたのであろう、正座して念仏を唱えはじめたのだった。

仏壇にある対のロウソクの火がバチバチと鳴りだし大きくなって揺れている。私ははっとして、阿弥陀如来の後光が、あの場所での情景と同じように思えた。そういえば、

祖母は仏壇のことを山と呼んでいた。阿弥陀如来も白蛇も何も語らず、姿も見せない。

了